
翼

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼

【Nコード】

N1653BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

AIR短編。

劇場版アニメで扱いが酷かった橘敬介の自己妄想補完。

橘敬介が天使を見たのは、ある夏の日だった。

出来たばかりの防波堤　水害の多いこの港町に、やっと出来たばかりの白いコンクリートの塊。

それを台座のようにして、天使はその上に立っていた。

風の音。潮の香り。

防波堤の上では稀に、その二つが苛烈なまでに吹き上がってくる。ちょうどその風が吹くとともに、天使の髪が舞い上がった。

風に流れる金色の髪が、白と青のコントラストの背景、砂浜やコンクリート、海と空に対して酷く際立っていく。

僕はそれに目を奪われ、足を止めた。

髪が風に奪われ、あらわになった天使の背を見つめる。

確かに、今、彼女には翼が生えているように見えたのだが。

今は見えない。

きつと、この太陽に焼かれてしまったのだ。

翼は、人が持つていいものではないから。手にした不実の翼は奪われてしまう。

小学生時代に歌わされた「イカロスの翼」の歌詞を思い出しながら、自分を嘲った。

ただの、幻覚だ。

あの両手を広げた少女の輪郭が、翼のように見えただけの　妄想。

この猛暑に学校に通うのが酷く億劫だった。

その現実を忘却しようとしたにすぎない。

僕は、少女の顔を拝もうと、少しばかり身体を堤防よりに傾けた。

その少女　クラスメイトの名前は知っていた。

神尾郁子。

もう僕の目には、彼女の翼は見えなかった。

僕は神尾 郁子さんとは、一度も話した事がない。

否、僕が硬派というわけではない。かといって軟派でもないが、女性とは親しい方だと言えるだろう。

単に、彼女がクラスで話さないだけだ。

別に、苛められてるわけでも、阻害されてるわけでもないはずだが。彼女は、ひとりで居る事を好んでいた。

いつも一人で窓際に座り、外の眺望を見る。

見るのは寂しい町並みでも、最近整い始めた商店街でもない。

空と、海と、風を見ていたのではないか。

と、今になって思う。

まあ、そんな事はどうでもいい話だ。

僕が今知りたいのは 彼女の翼についてだった。

最近はその事ばかりを考えている。

顔を、窓へと向けた。

夏期講習を受けながらも、僕の視線は防波堤へと向かう。

今日も、彼女はあそこにいるのだろうか。

目を伸ばした窓の外は、今日も風が光っている。

僕が防波堤に足を伸ばしたのは、それから三日経った後だった。

いや、正確には、彼女に近づいたのが三日後なのだ。

朝の登校と、夏の遅い夕方の帰り道。

僕はあの防波堤前の並木道を歩く途中、同じ場所で、いつも彼女を見かける。

今思えば、彼女は三年間ずっとあそこに居た。

僕が、それに気づかなかっただけだ。

彼女の、背中を見る。

翼は無い。

僕は、何を考えているのだろうか。

と、彼女の背を見る度に思う。

翼などないのだ。そんな当たり前のことを、僕は許容できずにいる。この空想は害だ。

蝉が鳴くとともに、夏の暑さを知覚する。

海流が砂浜を叩き、砂を削るとともに潮騒を起す。

白濁の雲が堆積し、そのあいだから日光が地面を焦がし、陽炎を作っていく。

その陽炎の先から見渡せる風景の中では、風が全くなく。

不透明な空の中でカモメは身を擦じらせて、空を飛ぶどころか海に吸い込まれるように墮ちていきそうだ。

彼女はこの暑さの中でずっと立っていて、気を狂いはしないのだろうか。

いや、案外、あそこの防波堤は涼むに適している場所なのだろうか。

また、くだらぬ事を考えた。

彼女の事など、考えてどうする。

僕にとってそれらの事は、どうでもいい事なのだ。

僕は地面に足をつけて、この道をまっすぐ歩いて、学校に行かねばならないのだから。

彼女の背に翼は ない。

あるべきではない、とは思わないが。

やはり、無いのだ。

この空想は打ち捨てなければならぬ。

だから、僕は今日彼女に話しかける。

結局のところ、彼女に「私に翼なんかないよ」とでもいってもらわ

ない限り、この幻想は終わらないのだ。

しかし、どうやってそんな事を聞いたものか。

僕は彼女の背を眺めながら、ゆっくりと防波堤の壇上から近づいていった。

横の防波堤に手を伸ばし、よじ登り、真っ白いそのコンクリートの道を歩く。

「こんにちは」

そうして、背中に呼びかけた。

翼は、見えない。

「こんにちは」

返事は、ちゃんと返ってきた。
が、彼女は背を向けたままだ。
風を浴び、両手を広げたまま、小船一つすら浮いていない水平線へと視線を飛ばし続ける。

「」

二の句は、告げない。

そもそも、クラスメイトではあるが　僕は彼女の事など、ろくに知らないのだ。

調べるにも、夏休みだ。

そもそも、彼女の事を知っている友達など、いるのだろうか。
そこまで思考を及ばしたところで、彼女が返答をした。

「何か、用ですか」

単刀直入な、返答だった。
なら、こつちも単純に返そう。

「一体、何をしてるんですか」

彼女の姿に好奇心を抱いたところで、怪しまれる事はあるまい。
この、馬鹿げた妄想を知られる事は無いと、判断する。

「
」

沈黙。

口を結んだまま、彼女は風を浴びる。
陽光を含んだ光る風は、彼女の髪を柔らかく撫でていた。

「両手を広げて、いつもそうしてるから」

一つ、不思議そうな顔をわざと作って。

「翼でも、あるのかと」

聞きたかった、質問を告ぐ。

これで、用件は済んだ。

僕は返答を待つため、彼女の横顔を 未だ、こちらを一目すら見
ない顔を眺めながら、ただ背筋を伸ばす。
彼女の返答は、また単純だった。

「私に翼なんか無いよ」

その言葉が、彼女の口からつむがれた後。
僕はがっかりとした。

やはり、翼が生えている事を　僕は望んでいたのだろうか。
もう一度、彼女の背中を見た。

翼は、もちろん生えていない。

ついに諦め、彼女の会話を適当に打ち切ろうと、顔を見ると。
やっと、顔をこちらに向けてくれていた。
笑顔だった。

微笑を　本当に薄く浮かべた後、何かに諦めたかのようにして。
ひよつとすれば、僕は彼女と同じような顔をしていたのかもしれない。
い。

そんな顔をして、彼女は

「私は、空を飛べないから」

安易な論理式を展開して、口を閉じた。

唇が薄く、震えていた。

その震えまで、僕が見ていたのは　何故だったのだろうか。

今は、その答えを用意に導き出せる。

十数年も後になって、僕は同じ場所で空を見ていた。

風と潮の匂いに、変化は無い。

今も、あの時も、一千年前だろうと変わりはしないのだ。

「
」
僕は今、あれから十数年も経ってから、同じ場所に立つことになった。

町並みは随分と変わってしまった。

だが、この防波堤だけは十数年も変わらぬままの姿を残している。

「
」

僕は、この町に。

娘の様子を見るために来ていた。

彼女の家に向かい、そして彼女と僕との間に出来た、娘の生活を見て 呆然とし。

足を、ここに向けてしまった。

そして、海を見ている間に気を取り戻し、呟く。

「似ていた」

娘は、彼女に似ていた。

少し気の利いた人間なら、何を呆然としているのか、と罵るだろう。

お前は、十数年間も、自分の娘の顔を見る事が無かったのか、と。

その通りだ。

見た事が無かった。

「
」

沈黙し、海の彼方に目をやった。

理由はある。

僕はこの町に訪れるべきではない、と考えたのだ。

観鈴とは、二度と会うべきではないと。

もし、彼女が、幸せに暮らしているのならば。

まるで 郁子のような生活を送っていないのならば。

そっと、しておくべきだと。

しかし、彼女は一人だった。

郁子と、全く同じだったのだ。

日々の生活も、淋しい時に笑う表情も、彼女がその両手を翼のように広げる場所も、何もかもが。

僕の目には、恐ろしいまでに瓜二つに見えた。

早く、この町から連れ出したほうがいい。

出来うるなら、僕の傍に。

僕はそう考え それでも、手をこまねいていた。

連れ出して、どうなるというのだ。

僕は、あの子の母親を。

「助けられなかったくせに」

小さく、吐き捨てるように言葉を浜辺に捨てた。

やり場の無い、その言葉が海へと流されて、波でできた白い泡と混ざる。

それを見届けたあと、僕は目を再び閉じた。

あの夏の幻想を、この瞼の下で続けよう。

僕が、あの日、彼女に話しかけたとき。

おそらくすでに、僕は郁子に恋していたのだ。

あれから、どれくらい彼女に会いに行つたのだろうか。

大事なのは回数だけでなく、時間もだった。

会いに行きたびに、彼女の前で立ち止まる時間は長くなる。

つい長くなった、ではない。

僕はわざと、少しづつ、それこそ彼女にそれを指摘されない程度に時間を延ばしていった。

「よく、来るね」

「ええ」

延ばした時間で得られる会話は、その程度。

愚にもつかない世間話すらない。

到底、話しやすいという間柄にはなれなかった。

いや、彼女がなるうとしなかった。

嫌われているわけではない、はずだ。

防波堤の白く細いコンクリートの道を歩き、横合いから彼女に話しかけたとき、僕の目が間違つてなければ嬉しそうに、少しだけ唇をゆるませる。

あの瞬間が、好きだった。

だから、何度も何度も話しかけた。

夏の間、何度も。

その夏も炎暑となり、いよいよ夏休みも中盤にさしかかったところで、僕は商店街へと赴いた。

新しく出来た菓子店で、ケーキを購入するためだ。

それが彼女への進物であることは、いうまでもない。買った足で、そのまま防波堤へと向かう。

「こんにちは」

「こんにちは」

いつも通りに挨拶をすませ、いつも通りに会話はない。彼女は海に伸ばしていた視線を、一瞬だけこちらにやる。

「
」

その隙をついて、ケーキを無理やり渡した。

彼女は反射的にそれを受け取って、呆然とする。

が、やがて気をとりなおし、黙って防波堤に座り、その中を開けた。

僕は、すでに防波堤へと座っていた。

とりあえず、二人で座りこむ事には成功した。

ケーキの箱に感謝の念を送りつつ、なんとかここで会話を広げよう
と考える。

「ケーキは好きですか」

「……好きですよ」

答えて、こちらへと顔を向ける。

「ありがとうございます」

「いえ」

互いに会釈し、応じた。

顔が、近い。

ここまで近づいて彼女の顔を見るのは、初めてだった。瞳を覗き込
みながら、また口を開く。

「こうやって、友達とかと食べる機会ありますか？」

軽口を叩く。

まるで喧嘩を売ってるようで、彼女を無為に傷つけて嫌われる恐れ

もあつたが。

なんともする自信はあつた。

ともあれ、会話さえ膨らませられればよかった。

「妹が、一人」

応じず、冷静に答えた。

箱を丁寧にゆつくりと開け、彼女は僕の手にはケーキとプラスチック製のスプーンを渡す。

さらに、顔が近づいた。

手が、触れあう。

同時に、僕のうなじの辺りが少しだけ赤くなる。

「あと、友達も……」

この程度で、のぼせてしまうような男だったか。

と自分に問い詰めるが、どうにも違う。

身体と頭のどこかで、まだわからないのか、と返事が返ってくるようだった。

それを必死に押さえつけ、彼女の顔へと意識を立ち直らせた。

「いたかな」

過去形で、彼女は語る。

「今は、一人だけ」

頭の中で、言葉を整理しつつ。

黙って聞こうと思ひ、どこことなく緊張している身体を落ち着かせるようにケーキにフォークを刺し、口元へと運んだ。

「二年前にね、一人だけ出来たの」

彼女の手のケーキに、やっとフォークが突き刺さる。僕が口にするまで、待っていたようだ。

「でもね」

四分の一に切れたケーキが、彼女の口元へと消えた。

「でもね、別れちゃった」

僕の口の中のスポンジケーキは、咀嚼するまでもなく、胃の中に消えていた。

噛む物がなく、ただ歯だけが音もなく軋んで、不快に耐える。そう、不快だった。

「二人は一緒にいちゃ、いけなかったから」

これ以上、この話を聞きたくなかった。

彼女がなんとも、辛そうに話すからだ。

別に、彼女が僕に感情を当てようとして話しているのではない事は、十二分にわかっていた。

彼女は、今のところ僕に興味などないからだ。ただ。

その「友達」が、彼女にとって今までで一番大切な存在で、それを失ってしまった事が。

よくわかってしまった。

「なんてね」

言葉が、途切れる。

「こんな乙女チックな話には興味なさそうだね」

茶化しを入れて、またケーキにフォークを差し入れた。

彼女は、その一言で全ての会話を冗談として、処理するつもりのもりだよ。うだ。

僕は、それに対して。

「ええ、ありません」

湧き出る感情を閉ざすため、応じた。

視線を彼女の背にそらすと。

また、翼が見えるようになっていた。

夏の幻想は止まらなかった。

あれから、ますます酷くなったとわかっていい。

否。

幻想ではなく、この病がいよいよ強くなってしまったと言おう。

僕は彼女に恋をしていた。

気づいたのは、遅すぎるとわかっていい。

今思えば、初めて出会った時に見た翼も、この想いが深くなるにつれて、また見えるようになった翼も。

僕の心の病が、見せているのではないかと疑っている。

防波堤の彼女を見るたびに、胸骨の中に隠された心臓が軋みを立てるのだ。

彼女の二年前の友達とやらに、嫉妬し。

こうして頭を抱え、ただ彼女の顔を思い浮かべようとする。ただ、彼女が愛しかった。

「
」

翼が見える。

その翼を広げる代わりに、彼女は手を横に伸ばす。

「こんにちは」

返ってくるのは、少しだけ嬉しそうな顔と、声色。

そして、今日も彼女に声をかける。

「今日の風は、どうですか」

翼の事を、話そうと思った。

「悪くないよ」

彼女は白い羽毛でできた羽根を閉じたまま、空を仰いでいる。思えば、あの翼が開いたことはない。

「空だって、飛べそう」

少しだけ、強い風が流れてきた。

翼はそれでも開かない。

「飛んだらどうですか」

「飛べないよ」

二人とも、視線を交わさずに会話する。

ただ、僕はせめて彼女と同じ物を見ようと、一緒に空を仰いでいた。

「私には、翼がないから」

「……」

嘘だ。少なくとも、僕の目には翼があった。

その事を、それが意味する事を、もう一呼吸した後に。

彼女に、自分の想いを告白しようとして やめた。

「昔はあったけど、もうないの」

「」

どういう意味だろうか。

続くとは思っていなかった彼女の返答に、頭をめぐらせる。

「昔ということ？」

「」

問う言葉に、彼女は少し沈黙した後。

次の風が来たと同時に、それに言葉に乗せるようにして呟く。

「御伽噺、かな」

言葉と、髪が風に流れた。

立ち上がり、その視線は一度空へと向いた後、そのまま僕の顔へと移る。

「聞きたい？ 敬介さん」

「」

一瞬、名前を呼ばれて呆然とし。

次に、何と答えよう、と思考する。

正直、聞きたくない。

昔の事など、聞きたくないのだが

「聞きたいな」

彼女に近づいていくためには、聞くしかない結論を出した。

「じゃあ ケーキの御礼に、聞かせてあげる」

「ええ、お願いします」

軽く笑い返すと、軽く息を吸う声が聞こえた。

「敬介さん」

二度目。

彼女に名前を呼ばれたのは、さっきが初めてで。

今が、二度目だった。

そんな事を考えながら、僕は黙って口を閉ざす。

代わりに彼女が、その唇を擦りながら、小さく紡いだしたのは

「この空の上には、翼を持った少女がいるの」

翼を。

羽根を持った、空にいる少女のおはなしだった。

この空のどこかにいる少女。
それはまさに、御伽噺だった。
だが。

僕の目には、確かに彼女の翼が映っていたし。

彼女の目は、とても悲しそうだった。
だから、信じる。
けれど。

「自分で作った寓話なんですか？」
本当は信じている癖に、口では嘘を吐く。
ありえないからだ。

「私にそんな才能ないよ」
現実にはありえない翼を見て。

「その子が、聞かせてくれたお話」
現実にはありえない話を、彼女と話す。

「旅芸人なんだって」
「友達って、前に話してくれた人ですか」
「うん」

ああ。

「私を、空に連れてってくれるはずだった人」

恋人同士で話す会話としては、素敵なのかもしれない。

「夢を見るの」

もはや、彼女の友達はいなくなってしまった。

「空の夢」

共有できるのは、彼女と僕だけ。

「その子の話を聞く前から、ずっと」

だけ。

「空ですっと泣いている、少女の夢を見るの」

この話はきつと本当だから。

そんなものを認めることも、話すこともあつてはならない。

「郁子さん」

僕は彼女の名前を初めて呼び、その話を否定する。

「そんな話ありえないですよ」

「うん」

否定する理由は簡単だ。
その理由すら言う必要がないし、言いたくもない。
その話が本当ならば。

「嘘ですよ。その旅芸人の友達が作ってくれた、悪い冗談です」
彼女が死ぬということではないか。
今見ている夢の終わりに。

「だったらいいのにね」
「……」

そんなもの、くだらぬ戯言だと。
笑いあえたらよかったのに。
僕と彼女は、ただ沈黙するだけだ。
僕はただ、海を眺める。
空など見たくなかった。
ただ、一つのことだけを思う。

翼なんてなければ、よかったのに。

彼女と別れて、その夜に。
夢を見た。

翼の白昼夢ではない、床の間の夢。

彼女の夢だ。

夢の中の彼女は、やはり翼を持っていて。

一人だけ、ただ白いコンクリートの台座に立つ。
一生。

誰も、話しかけない。

誰も、傍に居ない。

誰も、抱きしめようとしない。

背景は海と空で青く、また光と雲で白く彩られ、大層綺麗な夏の空
気に彩られている。

彼女は飛ぶことのできない翼の代わりに、ただ手を伸ばす。ずっと、
伸ばし続ける。

その手は、誰にも握り締められない。

そして、彼女もそうしようとしなない。

彼女は、天使だから。

人間が、触れていいものではないのだ。

だから、皆は近づかない。

僕も、そうした。

それでいいと思った。

だけど、それでも。

僕は彼女の事がどうにも気になってしまつて。

近づけない代わりに、遠くで彼女を見守ることにした。

そして、いよいよ彼女が空に飛び立つ日が来た。

僕は、それを見届けることにした。

彼女は

倒れた。

空に飛び立つこともなく、その翼が開くこともないまま。翼の代わ
りに見立てた手を広げたまま、崩れ落ちた。

翼を開くには力が足らず、人の手では飛ぶことなどできなかったの

だ。

僕は、走り出した。

天使だろうが、人間だろうが。

やっと、そんな事は関係ないとわかった。

僕は、彼女に恋をしていたのだ。

だが、やっと手を伸ばして、彼女の傍にたどり着いた時には。

その身体は冷たくて、物を語ることはなく。

ただ、寂しそうな顔をしているだけの、二度と笑うことはない。

やっと翼の重みから解放された、人間の骸と化していた。

後に、残るのは。

僕の絶叫だけだった。

夢はそこで終わり。

続きなど、あるはずもない。

全ては闇に包まれて、残酷な夏が消えうせていった。

ああ。

やっとわかった。

彼女は淋しいのだと。

最初に話しかけた理由は、興味ではなかった。

あの飛べない翼を背負った姿が、この熱い夏の中、あまりに淋しそうだったのだ。

その姿を感じた僕は、話しかけずにはいられなかったし。

彼女と話して、恋をせずにはいられなかった。

「夏、終わっちゃうね」

不意に、声が僕の背中を襲った。

いつもとは、逆。

思考を断ち切り、ただ彼女との会話に集中する。

「今日はずいぶん早いね」

「朝早くから、待ってたんですよ」

また嘘をつく。

夜からだ。

ずっと、夜からここで立っていた。

朝も空けぬうちに、家を飛び出して。

ずっと、ここで立って風を浴びていた。

そうすれば、彼女の気持ちが少しでも判るかと思ったから。

「ねえ」

僕はただ彼女と視線を合わせ、声を聞く。

「もう、ここにはこないで」

彼女は、僕と出会ってから。

初めてちゃんと笑った後、その台詞を呟いた。

僕はその台詞よりも、笑顔の方に意識がいく。

実のところ、彼女がいつか言い出すのはわかっていた。

「もう、会わないでいようね」

「何故？」

問い返す。

笑顔が、寂しいからだ。

彼女は、寂しそうにしか笑わない。

「……」

「私、変だと思っし」

「何が、ですか」

それを言ったら、僕のほうがよほど変だ。

本人も気づいていない、彼女の翼が見えている。

とても飛べそうにない、寂しそうな翼を。

「郁子さん」

僕は最初、その翼に惹きつけられ。

今では、彼女にとって邪魔なものだと考えている。

「僕のことを嫌いですか」

冷静に呟きながら　　心中では必死な問いに、彼女はただ首を優しく横に振る。

「　夢を見るの」

返ってくるのは、回答ではなく。

別なことを示唆する言葉。

おそらく、その言葉には意味があるだろう。

だが、僕はもうそれに興味はなかった。

「空の夢の話は、いいんです」

「敬介さん。私は」

「郁子さんは、僕のが好きですか」

今まで、いつか言おうと思っていた言葉を、呟く。

「……」

彼女はただ、沈黙する。

その手は翼のように広げられることもなく、ただぎゅっ、と握り締
められていた。

握っているのは、僕の右手だ。

「私ね」

彼女は、淋しそうな笑顔のまま、さっきの返答を続ける。

「こっやって、人と話してるとね。背中が痛くなるの」

そう言って、右手で自分の胸元を押さえた。

あの背に生えた翼の根元は、きつと心臓へと通じていて。

「多分、すぐに死んじゃうと思う」

身体を焼いているのだろう。

「だから、敬介さんの傍にはいられない」

言い終えた後。

また、沈黙する。

そして、また口を開く。

「友達がね」

彼女が、初めてできた友達は。

「私のせいで、一緒に死んじゃうところだったんだ」

彼女が嫌いなわけではなく、むしろ彼女を守るために。

「だからね。もう、私に誰も巻き込みたくないんだ」

自分の事や、空の少女のことよりも。おそらくは目の前の彼女を助けるために、別れたのだ。

「一人で夢を見ることにしたの」

だが、それは間違いだ。

「だから、おわかれしよ」

一人で生きたところで、それに何の価値もない。

「郁子さん」

ただ、真正面から彼女を見据える。

そうすれば、あの翼は目に入らない。

そんなものに、興味は無い。

弱い。

あまりにも、弱いと思った彼女の傍に、いてあげたいだけだ。僕が、いたいただけだ。

「夢は」

駄目なら、死んだらいい。

僕も、彼女も。

「郁子さんは」

そうでなければ、死ぬまで不幸のままに違いないから。

「郁子さんの夢は、何なんですか」

ずっと、空と海を眺めて。

「空の少女じゃなくて、郁子さんがやりたいことがあるでしょう」

考えるのは、空の少女の事ばかり。

「それを教えてください」

そんな事を、死ぬまで続けることができるほど。

彼女は強くない。

そして。

「……あのね」

僕も、彼女と離れて。

「夏、続けたかったな」

子供のように眩く、この少女を。

「私ね、この夏に敬介さんが傍にいてくれて、楽しかったんだ」

とるに足りないことを、自分の好きな人間と一緒にいるという、当たり前前の事を。

「だから、この町を出て、一緒に 旅をして」

何よりも幸せそうに語る少女と離れて、またいつか、空を見るたびに思い出して。

「この夏を、ずっと続けるの」

一生生きていくことなど、できはしない。

「僕も、そうしたい」

「ありがとう」

だから、僕は、決意する。

「出来たら、よかったのにね」

「」

素晴らしい、夢だ。

空の少女の夢よりも。

旅芸人の話よりも。

神尾郁子という少女の夢の方が、よっぽど素敵じゃないか。だから。

僕は、それをただ実行するだけだ。

「さよなら、敬介さん」

彼女は、背を向け、去ろうとする。
が、動けない。

手を、僕がずっと握ったままだったから。

「敬介さん」

彼女は、背を向けたまま。

「さよなら……しよ」

涙声で、別れを告げるだけだ。

だが、僕は手を離すつもりなどない。

それから、ずっとそうしていて。

経った時間が、わからなくなるぐらいに過ぎた後。
ゆっくりと呟いた。

「行こう」

かまわない。

「一緒に行こうよ」

僕と、彼女の夢だ。

「僕は、郁子さんの傍に、ずっと居るから」

それを本物にしよう。

「この夏を続けよう」

言い切り、彼女の返答を許す前に。

彼女の口元を、自分の震える唇で押さえつけた。

僕はその夏、彼女と駆け落ちをした。

ただ防波堤でひと夏話しただけの。

飛べない翼を持った、少女と。

僕の天使と。

天使が死んだのは、それから数年もしない夏の事だった。

色々と、苦労したけれど。生活も安定して、子供も生まれて。

僕が、彼女を幸せにしたと誇れる日が来ると思った頃に。

彼女は死ぬことになった。

「……………うん」

白いベッド。病院の一室で。

彼女は翼を折りたたんだまま、そこに横たわっている。

その手は、空ではなく僕の顔へと伸ばされていた。

「やっぱり、死んじゃうね、私」

「……………」

寂しそうな笑顔を浮かべて、郁子は呟く。

「死なないよ」

否定する。

「死なない」

ただ、否定して。

郁子の細い指を自分の指と重ね、手を深く握り締め、呟く。

「……ありがとう」

呟き。

一息で消えるような小さい声で、郁子は呟いて。

「でもね」

あの、寂しそうな笑顔ではなく。

「楽しかった」

満面の笑顔で呟く。

「私の一生分、敬介が幸せにしてくれたよ」

それは、僕にとって、とても幸せな呟きで。

この世で一番聞きたくない言葉だ。

「まだまだよ」

僕は、否定する。

「まだ、この夏は続いていくから」

だが、郁子は言葉を続ける。

「ありがとう」

もう死ぬことは、わかっていた。
郁子も、僕も。

「」

沈黙し、唇を噛む。
僕は。

今だに、郁子の翼が見えることを告げていない。
嘘でなければならぬからだ。
空の少女の事も。
郁子が死ぬ、夢のことも。

「」

だが、郁子は死ぬ。
もう死ぬ。それはわかっている。
だから、告白しようと思う。

この嘘が、一生の心残りとなる前に。

「でもね、敬介さん」

僕は、口を開こうとして。

向けた郁子の顔が、涙であふれていることに気づく。

その瞳は、横の少女へと向けられていた。

まだ物心もつかない、僕と郁子の子供。

観鈴へと。

「本当はね」

笑顔のまま、涙を流しながら。

「もう少し、敬介さんの傍にいたかったな」

少しだけ、初めて悔しそうな顔を見せて、唇をひきつらせて。

僕の手を、初めて自分から力強く握り締めながら、呟いた。

「……」

舌を、自分で噛んだ。

顔の震えは止まらないが、言葉さえ吐かなければかまわない。

そして、時間を置いて、呟く。

「いられるぞ」

嘘を。

「君には、翼なんかないんだから」

永遠の嘘を。

彼女が死ぬまで、ずっと嘘をつくことを決めて。

僕は、ただ彼女の手を握り締めた。

そして、病院の回診の時間とともに彼女から離れる。
僕は、病室から去る前に。
彼女の背中に、あの翼を見た。

「翼なんかなくていいのに」

廊下で、一人呟く。

狂ったように、台詞を呟く。

「翼なんか、なくていいから」

そんなものは、いない。

だから、その代わりに。

「郁子を連れて行かないでくれ」

神様。

ひよつとすれば、あの翼を与えたかもしれない存在に祈る。

翼だけ、奪ってしまえばいい。

あの不実の実だけを、なぜ焼き尽くしてくれないのだと。
憎む。

いない。

人が幸せになるのに、翼なんていない。

僕は歩いて、病院を出て。

家へと帰る前に、空を仰いだ。

見えるのは、病院の屋上。

彼女は、そこにいた。

いつか見た、あの防波堤での光景のように
翼の輪郭を作る。

郁子が両手を広げ、

悔しいことに、風は吹かない。

僕の足元には、未だ物心をつかぬ、僕と彼女の子供が一人。観鈴は郁子に対して、よくわからぬまま手を振っていた。

そんな光景が、僕には地獄にしか見えなかった。

彼女達に気づかれぬように、僕は口を手で押さえ、頬を爪でひつき、涙と嗚咽を抑えて。

ただ、絶叫を抑える。

翌日。

郁子は死んだ。

あの、忌まわしい羽根は、その骸についていなかった。

夏は、終わったのだ。

僕は、観鈴と離れた。

それが最良だと思った。

いや、それは言い訳にすぎない。

僕は、郁子の喪失から立ち直れなかった。

親族の言うままに、観鈴をこの手から離し、郁子の妹であった晴子に押し付けるように預けたのだ。

彼女は、僕と出会ってから　観鈴を生んで、今までの短い彼女と僕との、特別な夏の間。

一生分の幸せがまつていたと言ってくれた。

あれは、僕も同じ事だった。

僕の一生分の幸せは、全て失われてしまった。
だから、観鈴の事を気にかける力など、僕にはもう残されていないか
った。

身勝手な話だ。

だが、言い訳も道理こそは通ったものだった。
この町だ。

彼女は 郁子は、この町が嫌いではなかったと言った。
古臭い、木造の町並みも。

やっと出来始めたばかりの商店街も。

新しく出来た堤防に吹き付ける、潮の匂いも、一寸の穢れもない雲
も空も。

堤防に立つことで聞こえる、この町の全ての息吹を愛していた。
今は廃線となつてしまった列車の音。

学校から聞こえる、サッカー部の喧騒。

人の笑い声、掛け声、叫び声、生を感じさせる全て。

父も母も、妹も、この町に住む人達全て。

それらは彼女にとって、触れることは出来ずとも、交わることは出
来ずとも、繋がる事は出来ずとも。

とても優しく、愛しいものだった。

だから、彼女はああして優しくいられた。

観鈴は この町で、静かに。

こんな父親の事など忘れ、翼も、空の少女も、何にも触れず。

いずれ、また恋をして、幸せに生きていく。

郁子の代わりに。

郁子が望んだ、本当の夢をかなえるために。

僕と、郁子が叶えられなかった夢をだ。

だが。

観鈴の背には、翼があった。

とても綺麗で、天使のようにおぞましい。

人間が生きていくのには、いらぬ翼だ。

あの翼は、晴子には見えていないだろう。

おそらく、僕にしか見えていない。

誰かが、あの翼に気づいて、空に連れ去られぬように、手を繋いであげなければならぬというのに。

誰か、同じ翼を持った人間が救わねばならないというのに。

だが、僕には翼など無い。

あるとすれば、きっとそれは　雲とも、影とも似つかぬ灰色に薄汚れていて。

空を飛ぶどころか、歩く事すら億劫な重力となって、背中に押し掛かっているのだろう。

その翼は、誰を助ける事も出来ない。

愛する人を、空に連れて行くことも、逆に連れ戻すこともできない。何の力もない、意味のない翼だ。

せめて、僕のケーキは。

あの居候の青年は、ケーキを届けてくれたのだろうか？

娘へと届いたのだろうか。

僕の手は、彼女の元に届くのだろうか。

手を、翼のようにして、横に大きく伸ばす。

翼の輪郭をこの身で描きだし、空を見た。

白い雲が、ちょうど橙色に染まる頃だった。

もうすぐ、炎暑だ。

時期に、夏はいよいよ終わりを近くして。

蝉は死に、海鳥の泣き声も金切り声に変わるだろう。

防波堤の上から道路へと目をやると、陽炎が起こっていた。

僕は防波堤から飛び降り、陽炎へと歩いて、それを通り過ぎる中で。

もう一度、あの夏を。

もう一度、僕はあの夏を取り戻すことが出来るのかと苦悩する。

もし叶うるならば　今度こそ、終わらない夏を。

一つ、それだけをこの夏へ祈った後に。
夏の終わりまでに、観鈴を引き取る事を考え始めた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653ba/>

翼

2012年1月4日05時46分発行